

やましんかわら版は
山新販売店と読者を結び
ミニコミ誌です

やましんかわら版



発行部数 9万7,000部

毎月5日発行

今月の
いちばん
情報!!

東北唯一のプロライダー BMXにかける思い。



伊藤敬大さんが得意とするフラットランドは、芸術性の高い技を競い合う競技。自転車ではなぜこの動きが? というアクロバティックな動きが魅力。

社会人として働きながら、東北唯一のBMXプロライダーとして日々活動を続ける山形市の伊藤敬大(いとう・たかひろ)さん(26)。平らな床の上でアクロバティックな技を競い合うフラットランドと呼ばれる競技で、今年は全日本選手権年間2位の成績を収めるなど、雪国というハンディを物ともせずBMXが盛んな地域のライダーたちと競い合っています。そんな伊藤さんに、BMXにかける思いについてお話を聞いてきました。

Q、BMXを始めた経緯について。

▶初めてBMXに触れたのは16歳の時。最初はちょっとした趣味のつもりで、なんとなく安いものを購入しました。高価なものには手が出なかったので、街乗り用の2万円ほどのモデルだったと思います。BMXも競技によってタイプが異なり、大きく分けてレースとストリート、また現在自分がやっているフラットランドという三つがありますが、当時はそんなこともあまり分からず、ただ近所でいくつか技の練習をしていました。そんな時に、昔フラットランドをやっていたという人に偶然声を掛けてもらって、練習の目標になればと1本のビデオを貸してもらいました。

ビデオは「King of Ground(K.O.G)」という、フラットランド全日本選手権のものでした。当時、BMXについて何も知らなかった僕は、大会で繰り広げられる技の映像を初めて目にし、衝撃を覚えました。同時に、選手たちがとてもカッコよく感じました。ストリートスポーツをやっている人は、怖そうとか、周りからそういう目で見られてしまいがちですが、本気でやっている選手たちは、裏では必死で練習に打ち込んでます。そのギャップというか、競技に対するひたむきな姿勢

に惹かれ、とても憧れました。いつか自分もこうなりたい、たとえ何年かかってもやってやる。僕は、その時、BMXのフラットランドでプロを目指そうと決意しました。そして卒業や就職を経て、時間はかかりましたが毎日練習を続け、始めてから9年目となった昨年に、夢だったプロになることができました。

Q、仕事とプロを両立する難しさはありませんか。

▶僕の場合、本田アルミという企業に勤めています。社長はプロになった報告をすると、すぐに応援すると背中を押してくれました。遠征の時にも「頑張ってこい」と送り出してくださるので、幸運にもBMXと仕事の両立ができています。支援として、いくつかのBMXブランドからスポンサーになってもらっていますが、基本的にはパーツ代やタイヤ代、またパーツ自体を提供してもらっています。現在、日本には20人しかプロがいません。そして、その中でBMXだけで生活している人はたった3人。それほどに、プロ収入を得るのは難しい世界。ですが、プロとしての収入を考えるよりも、それでもさらなる高みを目指すことを追求したいスポーツなのです。

Q、伊藤さんがBMXで目指しているのは?

▶昔はK.O.Gの下にあるエキスパートクラスで決勝に行くことが目標でした。しかし、プロとなった今は、K.O.Gで1番になることが当面の目標です。そしていつか世界選手権で上位に入るようになりたい。また、BMXはまだまだアンダーグラウンドなスポーツで、イメージもそこまで良いとは言えません。本気で頑張っている、真剣な人たちがひしめき合っているスポーツだと認知してもらうためにも、まずは、山形で市民権

を得られるように地道に活動していきたいと考えています。それから、これはBMXを始めた頃から変わりませんが、もっとうまくになりたい。そこにゴールはありませんし、いつか必ず夢をかなえられるように、頑張っていきたいです。



BMXを始めて10年。25歳でプロとなり、さらに上を目指したいと話す伊藤さん。

プロBMXライダー 伊藤 敬大
090-5353-1950

Facebook 伊藤敬大 検索

早起きすると
人生が変わる!!

収入アップと
健康増進の両立。

配達
スタッフ
募集

未経験
OK!

山形新聞朝刊を
各家庭に
届ける仕事です。
年齢・性別不問です。

最終面に掲載の販売店に
お問い合わせください。